



1月号

ひだまり

今月のエッセー

人生は奇なり



皆さんは上の絵を見て、どのような感情を抱きますか。不安感？それともワクワク感？

今回の話は、「人生は奇なり」。奇なりとは「不思議で面白いもの」という意味です。

皆さんは、先々のことが決まっていた方が良いと思いますか？それとも決まっていない方が良いと思いますか？

私は、決まっていな方が良いと思っています。それは何故か？決まっていな方が楽しいからです。自分は、今どこにいて、そして、これからどこに向かうのか。勿論、不安が全くないというのは

編集後記



あけましておめでとうございませう。二〇一七年は酉年です。酉と書いて「とり」と読みますが、これは鶏を指します。

神様へ新年のご挨拶に向かった十支の動物の内、猿と犬の喧嘩を仲裁するために、猿と犬に挟まれた鶏は十番目の干支になりました。ではなぜ鶏を表す漢字が「酉」なのでしょう。

十二支はそれぞれの月を示すときにも使われました。十番目の月は酒作りの季節だから酉の字が使われたそうです。酉年はまさにお酒の年と言えるかもしれません。

お酒が飲めない私には、今年はずら一年になりそうです。 ◆本田真大

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

嘘になりますが、それでも不安以上にワクワク感があります。自分自身で未来を作り上げていると考える方が前向きだと思います。先日、弟に会いに石川県金沢市に旅行に行った時のことです。折角だからと二人で温泉宿に泊まり、旅の汗を流してひと休みしようかと思っていたところ、ある看板に目にとまりました。

『手相占い 三十分 三千元』

「旅先の勢いでやってみようかな。」と気になっていたら私に、弟が一言。「手相って、しわの加減によって三ヶ月で変わるらしいよ。だから、意味ないよ。」

「そうなのか・・・。」と私は初めてその事実を知り、止めました。

先々のことを知りたくなるのは、人の性。しかし、それに縛られて生きることは窮屈な思考ではないか、とこの時ふと感じたのです。

「人生は不思議で面白いもの」だと捉えて歩むことが人生を楽しくするコツではないのかな、と思った出来事でした。

◆田中仁秀

仏教のことば せつりのぼいかただいっし 雪裡梅花只一枝



一年の中で一番寒い季節となりました。私はこの季節になるとよくこの言葉を思い浮かべます。

「雪裡」とは深い雪の中のことです。しんしんと降り積もる雪景色の中、梅の花が一枝だけ咲いている。やがて、春となり梅の花があたり一面に咲き乱れる兆しであるということから、冬の寒さがあつてこそ、梅は香しい花を咲かせることができるという言葉です。

読んだだけで、辺り一面銀世界の中に、凜として咲く梅の姿がイメージできるかと思えます。

私が修行していた永平寺では、未

だに囲炉裏に炭をくべて暖をとっているため、ひとしきり冬の寒さは辛かった思い出があります。手足や耳がかじかみ、あかぎれが絶えなかった修行時代の冬。必死に唇をかみしめ遠い春の暖かさを待ちました。

暖房器具が整っている現代。冬の寒さや春の訪れを、なかなか昔ほど肌で感じられなくなってきたように感じます。暖房が利いた部屋で過す冬も大変ありがたいです。しかし、あの辛い時期を乗り越えられたことが、今の私にとって必要なものであったのだとしみじみ感じます。

◆深澤亮道

法のお話



三年度
田代浩潤
たしろこうじゆん

自分が考える

「おのれこそおのれ自身の主である。おのれこそ自身の抛りどころである。おのれがよく制御されたならば、人は得がたき主を得る」『法句経』

いつかも話題に取り上げた、「自灯明・法灯明」と呼ばれる史実中の言葉である。自とは自己、法とは釈迦の教えのことで、真理などと表現されたりもする。

死に際した釈迦に対し、弟子のアーナンダという人が師の没後、何を頼りに生きていけばよいのかという質問に対する応えである。要約すると「他者に頼ってはならない。自己を抛り所とし、法を抛り所としなさい」という意味。

ところで自灯明・法灯明は釈迦の教えで

ある。仏教徒とは釈迦の教えを抛り所とする人を言うのだと思う。だがどうだろう。仏教徒とは釈迦の教えに外れることなく順守する人のことと思っていないだろうか。自己よりもその外側の決まりとしての教えを遵守することが必要と思っ

てはいないだろうか。だが釈迦は自身の教えを順守するのではなく「抛り所」とするよう説いた。しかも自らの教えである法に先んじて自己を抛りどころとする様にと。

教えをそのまま順守するのであれば、自分で考える必要はない。無責任に他の誰かが説いたことを受け売りにその通りにやっていたらいいし自省も必要ない。その場合マニュアルといってもいいかもしれないし楽だろう。

しかし、自分で考えることなく、外側から与えられた規則を無責任になぞって過ごしていると、そのうちおかしなことになりはしないか。

昨今、企業での過重労働が報じられている。報道を見聞していると、ある企業では寝る間を削り殆ど休むことなく働くのが是であり、伝統とされているかのよ

うだった。集団内の人々がそれに本心から賛同しているのかは疑問だが、そこにはそれを順守し、疑ったり外れてはならないと自動的に思うような思考になつてしまっているようにも思われた。

では、私たちはそういう思考をして、しかもそれが自然となり、自分で考えることを放棄していることはないだろうか。少しおかしいと思ったり、違和感を得たらそれを意識で捕まえ、自分の行動を考えることが出来るだろうか。それとも、そんな心の引っかけかりはサッと流して周囲に同調することにしようか。

私たちの多くは職場なり学校なり、何らかの集団に所属している場合が多く、その中の調和は必要である。だが、自身の考えや想いを無思考に調和の犠牲にしているとしたら、それは調和の奴隷である。決して褒められたものではないだろう。

いかなる集団に所属しようとも、いっどこにしようとも私は私を離れ得ない。楽しいのも苦しいのも私。その当たり前で理に立つて冷静に考えるならば、やはり他を順守し頼りとするのではなく、自己を頼りとするのを忘れたくないものだ。



仏教の行事

寿餅



皆さんも毎年恒例の習慣として、お正月になると鏡餅を玄関や床の間に供え、新年を迎えるかと思えます。私たちも同じ様にお餅を飾る習慣があります。しかし、鏡餅とは呼ばずに「寿餅」といいます。

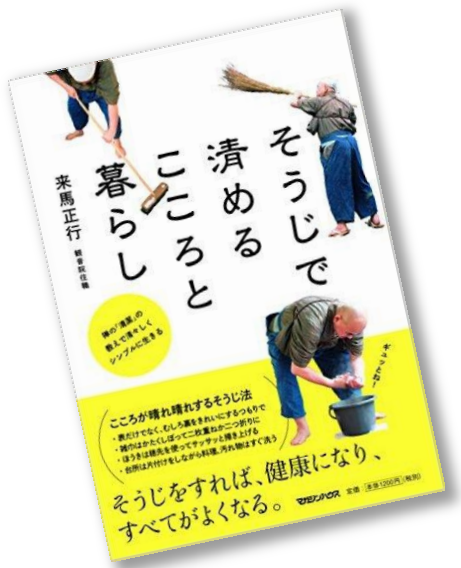
私達のお正月における大事な行事の一つとして、師匠への一年の健康長寿をお祈りするというのがあります。それは、正月にお餅を供え、三が日、朝のお勤めの後に行われます。

そして、正月四日に師匠のもとへ年賀のごあいさつにお伺いし、寿餅を奉呈します。私も永平寺での修行時代、この行事の存在を知り、始めるようになりました。正月といえども、修行の身である以上、実際に故郷に帰ることは出来ないままです。しかし、帰れなかったからこそ一層心を籠めてお祈りし、故郷の実家に郵送したことを思い出します。

◆伊藤正法



ひだまり書房



そうじで清める
心と暮らし
著 来馬 正行

JR中央線の武蔵境駅南口を出ると、駅前の景色の中に突如現れるお寺が観音院です。生い茂る巨木群の中に立つ凛とした佇まいは、都会の喧騒の中で生活する私たちを清々しい気持ちにしてくれます。

今回ご紹介するのは、その観音御院住職であり、また私たち所員に坐禅の教えについて講義していただいている来馬正行老師の本です。

修行道場では生活全てが修行です。もちろん掃除も例外ではありません。本の中で紹介される掃除のコツは修行道場で教わる方法がたくさんあり、改めて振り返るとその一つ一つに知恵と工夫が込められていることに気づかされます。

何気ない掃除の作法ひとつに、仏教の教えを学ぶことが出来ます。ぜひ御一読下さい！

◆本田真大